

文化人類学的研究における卒業アルバムの活用に関する一考察

大久保 豊

1 序論

1.1 本論の目的

本論の目的は、卒業アルバムという書籍が人類学的研究の資料としてどのように活用できるのかを明らかにすることにある。

日本において卒業アルバムとは、各種学校を卒業する記念品として、在籍していた学生が購入する写真集を指している。卒業アルバムの様式は様々であるが、校内での生活記録写真、肖像写真などを含む、という点では概ね共通している。それらの写真は、撮影当時の校内の様子を写し取ったものであるため、かつての在校生が当時をしのぶ写真、というだけでなく、当時の服装、風潮を知る上で様々な情報を内包している。ただ卒業アルバムは、出版数が少ない上に、各校で保管されている卒業アルバムを部外者が閲覧することが極めて難しい。また近年では、個人情報保護の観点から、学術的資料として卒業アルバムを利用することに対しては慎重さが要求されるようになってきている。こうした事情もあり、文化人類学において、卒業アルバムを素材として取り上げた先行研究は多いとは言えない。

しかし筆者は職業写真家として、卒業アルバムを職務として撮影、制作する立場にあることもあり、職業的な経験も踏まえた上で、卒業アルバムが文化人類学的研究に有用な資料となり得るのではないかと考えた。こうした個人的な発想が本稿の基礎となっているため、本稿は、必ずしも現時点で文化人類学で扱わなければならない喫緊の課題に取り組んでいる訳ではないことを予め申し添えておきたい。さらにまた、本論は試論の域を出るものではないということを正直に告白しなければならないが、それでもなお、今後のより有用な議論の土台となることを期待して、議論を展開していく。

なお、本稿で扱う「卒業アルバム」という語は、時代や状況によって「卒業記念アルバム」、あるいは「卒業写真帖」などと呼ばれることもある冊子、印刷物をも含んでいる。そのため本稿ではこれらの書籍を一括して「卒業アルバム」と表記するが、その時代、状況で流通していた語を採用することもある。また、記述が煩雑となると筆者が判断した場合には、「アルバム」という短縮表記を採用することとする。

1.2. 卒業アルバムを用いた研究の一例

既に述べたように、卒業アルバムの印刷物として最も大きな特徴の一つは、構成に一定の形

式があること、肖像写真を含む多数の写真を収録している、というところにある。この卒業アルバムを、文化人類学的研究に活用するとはどういうことなのかを説明するために、二つの研究を取り上げてみたい。まずは情報処理分野の研究ではあるが、データマイニングという分析技術を応用して、米国の卒業アルバムを検討した事例を挙げる。次いで、日本の朝鮮学校における制服の変遷を、卒業アルバムを通じて考察した研究を取り上げる。膨大なデータを分析対象とするデータマイニングの研究をまず取り上げてみることで、卒業アルバムの写真を分析する手法、そしてその意義について検討してみたい。

それではまず、データマイニングという手法を用いた研究として、ジノサーによる米国の卒業アルバムの分析の研究について取り上げてみよう [Ginosar 2015]¹。

データマイニングとは、「データの巨大集合やデータベースから有用な情報を抽出する」技術体系を指している²。特に近年では、主にインターネットの普及により加速度的に増加したデジタル情報の蓄積と、それをデータ分析するコンピュータの性能向上により、これまでは分析の素材として扱いきれないとされていた膨大なデータ（「ビッグデータ」とも呼ばれる）の利用価値が注目されるようになった。

ジノサーは、米国の 26 州約 800 冊の卒業アルバムに掲載されている、学生の肖像写真約 15 万枚を収集し、そのうち顔が正面を向いている約 3 万 7000 枚の写真をデジタルデータとして抽出した。そしてそれらの写真を時代毎、そして性別毎に分類して、顔の大きさが概ね一致するように編集を施した上でその画像を重ね、表情の「平均」を出力した。そうして作られた画像は、時代毎の髪型や服装、表情などの特徴を示すものだった。ジノサーは特に、笑顔の変化に着目し、年代を経るに従って、平均化された画像が示す表情は、よりはっきりとした笑顔を示す、という傾向を見出した。

例えば 1900 年代初頭、つまり写真技術の黎明期に当たる時代には、学生は口を閉じ、笑顔というよりもむしろ無表情であった。これについてジノサーは、当時の写真撮影が露光の完了までに長時間を要するため、被写体は一定時間静止している必要があったという技術的な要因と、歯を見せないことが当時の作法であったという文化的な要因に因るものではないか、と推測している。

ジノサーの研究は、サンプル数が数万と、データマイニングとしてはいささか小規模であるし、そのサンプルも地域性、時代性の観点から必ずしも均質ではない。このことは本人も認め

1 ジノサーの研究については、Wired のサイトでも、その要約を読むことができる。
<http://www.wired.co.uk/article/evolution-of-smiles-data-mining>

2 D. Hand, H. Mannila, P. Smyth. 2001. *Principles of Data Mining*. MIT Press. Cambridge, MA.

ているが、小規模ながらデータマイニングの解析方法を用いた研究、そして卒業アルバムを主要な素材として扱った研究の一例として評価することが可能だろう。

さて、ここで注目しておきたいのは、ジノサー自身は、アルバムの写真の質的調査、つまり写真一点一点に含まれる文化的要素を抽出したり、その意味を解釈するといった調査は、分析者の主観的要素が入り込む余地が大きく、客観的な検証に足る知見を得ることが困難であると見なしている、という点である。写真の内容を言葉で説明することは、あまり有益な結果をもたらさないだろう、というのである。

筆者はこの指摘に、部分的には合意する。確かに、一点、あるいは数点の写真から何らかの要素を導き出そうとしても、極めて印象論的、あるいは表面的な次元の分析に留まる可能性が高い。また被写体の肖像権の関係もあり、写真の詳細をつぶさに観察したところで、それを研究成果として記述することも困難であろう。

その一方で、写真の質的調査、すなわち写真が映し出している要素そのものを考究の対象とすることの有用性は決して低いものではないと筆者は考えている。一点一点の写真が、その当時の生活、風俗を克明に写し取っているとしたら、その独自性個別性は、膨大なデータを特定の枠組みで分解し、再構成してしまうデータマイニングの手法では決して捉えることはできないだろう。

その意味では、韓の『チマ・チョゴリ制服の民族誌』[韓 2006]は卒業アルバムに掲載されている写真そのものを資料として分析した研究の典型として挙げられる。本書は、日本の朝鮮学校において、朝鮮の民族衣装であるチマ・チョゴリに着想を得た学校制服がどのように制定され、普及していったのかという歴史的過程について描写すると共に、チマ・チョゴリ制服の纏う民族的記号の特質について検討している。そこで韓は、いつ頃どのような形でチマ・チョゴリ制服の着用が進んだのかを具体的に示すために卒業アルバムを活用した。韓が指摘しているように、学校制服、特に在留外国人のための学校が独自に考案、採用する制服には、民族性の表象という要素が不可分的に入り込むことになる。韓は、チマ・チョゴリ制服を着用した女子生徒の一群に出会った人々は、彼女らに記号化された「朝鮮」という民族的指標を否応なく見出すことになるとした上で、この認識は制服を着用する彼女ら自身にも生じるだろう、と指摘する。その認識がひいては、民族的な紐帯意識の一層の強化に繋がって欲しいという、学校側の意図を叶えるかも知れない。このような仮説的前提に基づいて、韓は都内の複数の朝鮮学校において、チマ・チョゴリ制服の普及の過程を辿った。

『チマ・チョゴリの民族誌』のように、学校制服の変遷に着目した場合、学校生活の様子を記録したアルバムは非常に有益な知見をもたらさしうであろう。もし、学校側の正式な決定としてチマ・チョゴリ制服を導入したのであれば、その決定について何らかの記録や書類が残る

可能性が高い。だが韓の示した事例では、従来の制服からチマ・チョゴリ制服への移行は、数年の時間的尺度で、徐々に定着するという過程を辿っている。そのため、制服の普及度合を理解する上で、卒業アルバムの写真を検証することは必須の作業であった。例えば生徒の肖像写真からは、着用している制服を知ることが可能となり、さらに学校生活の記録写真からは、どのような生徒がチマ・チョゴリ制服を着用しており、従来の制服との着用割合がどのようなであったのかを掴むことができたのである。韓の仕事は、こうした卒業アルバムの特質を、十全に活用したものであろう。

以上、卒業アルバムを分析材料として用いた二つの論考を挙げてみた。卒業アルバムはある程度共通した形態を持っているため、データマイニング分析の資料として極めて有用である事は明らかである。しかしデータマイニングが対象外とする、一つ一つの写真の比較分析も、特に文化人類学的研究において有用であることを、韓の研究は示している。

以上の論点整理を踏まえて次章では、日本において卒業アルバムがどのように発達してきたのかという、歴史的側面に着目して考察してみたい。

2 卒業アルバムの発祥と展開

2.1 明治期における写真帖の制作

日本において卒業アルバムはどのような経緯で作られ、技術的に展開してきたのだろうか。日本で卒業アルバムの前身となる「卒業写真帖」が登場したのは、明治後期であるという。19世紀にフランスで本格的な発達を遂げた写真技術は、数年の後に日本に紹介され、1862年の上野写真局をはじめとして、日本各地に写真スタジオが開業するようになった。最初期の営業写真家の一人に、熊谷で写真業を営んでいた吉原秀雄がいる。彼の下で写真技術を学んだ小川一真は、1877（明治10）年に上州富岡町で写真館を開設した。

小川は営業写真家として事業を営む傍ら、米国マサチューセッツ州ボストンの写真スタジオに留学し、写真技術だけでなくコロタイプ印刷という当時最新の印刷技術も体得した。1889（明治22）年に帰国した後、コロタイプ印刷工場として小川写真製作所を開業し、写真集（写真帖）、写真雑誌の本格的な制作・販売に乗り出した。

小川写真製作所では、当時の日本では最高水準にあった精緻なコロタイプ印刷技術を用いて、日本各地の名所風俗を記録した写真帖を数多く発行しており、その過程で大学の卒業写真帖の制作を手がけるようになった。

現在の東京大学の前身である、東京帝国大学では、1900（明治33）年より写真帖の出版が始まっており（図1）、慶應義塾大学では1905（明治38）年からの出版となっている。興味深いのは、東京帝国大学の写真帖は、1900年に開催されたパリ万国博覧会での展示物として、大学

の教授陣、学内施設の紹介を目的として制作されという事情である。そのためか、当時の写真帖には、在籍学生の肖像写真は掲載されていない。

やがてコロタイプ印刷の普及に伴って、写真帖制作は他大学、そして尋常小学校を含めた各種学校へと広まっていった。ただし、当時の写真帖は、価格が約 45 円（現在の基準では約 96 万円）と極めて高額だったこともあり³、在籍学生を対象としたものというよりもむしろ、学校側の記録、保管用資料として制作されてきた。

大正期以前の写真帖は、写真撮影技術の限界のため、教職員の肖像写真、在籍者の集合写真、学内風景の記録写真が中心で、生活感を生々しく伝えるような、いわゆるスナップ写真の類いは現在の卒業アルバムと比較して大幅に少ない（図 2）。また同一ページに写真と文字を挿入することも技術的に困難だったため、写真のページと重なるように氏名を印字した薄紙を挿入したり、見開きの片面に集合写真を配置し、もう一方のページに氏名を印字するといった方法が採用された（図 3）。

2.2 写真の大衆化と卒業アルバムの普及

その後小型写真機の普及によって写真撮影がより簡便になると、従来の静態的な写真だけでなく動的な写真表現が可能となった。それに伴って、写真帖にも、スナップ写真の割合が増加していった。1924 年以降は写真植字の技術が確立し、薄い別紙に文字を重ね書きする必要性が薄れていった。さらに 1915 年より発達してきたオフセット印刷機は 1950 年代には日本でも広く普及し、安価で大量の印刷が可能となった。このように、写真帖から卒業アルバムへの展開は、写真と印刷の技術的発達の歩みと軌を一にしてきたとすることができるだろう⁴。

1960 年代以降、日本ではカラーフィルムの普及が進んだが、卒業アルバムの本格的なカラー化は 1970 年代後半から進んでいる。当時カラー印刷はリバーサルフィルムを製版することで行ってきたが、リバーサルフィルムは印刷工程が複雑な上に高価であるため、多量の写真を用いる卒業アルバムのカラー化は、雑誌やグラビアといった分野と比較して手間や費用面で課題が多く、本格的な導入が遅れた。1976 年頃に、カラースキナーを用いた製版方法（レフカラー方式）が普及するようになってようやく、アルバムのカラー化が進むようになった。

2.3 デジタル技術の導入

2000 年以降、印刷分野に於いて、二つのデジタル化の潮流が生じた。一つは撮影機材のデジタル化である。1990 年代初頭から本格的に普及し始めたデジタルカメラは、急速な小型化、高

3 アフィニティー 2016 年 2 月 12 日「卒業アルバムの歴史」<http://a-creative.jp/blog/index.html>

4 一般社団法人日本 WPA ホームページ <http://www.waterless.jp/waterless/history.php>

品質化が進み、厳しい品質基準が求められる撮影業務分野でもデジタルカメラ導入の潮流が加速した。もう一つのデジタル化は、編集、印刷分野におけるデジタル化である。1980年代以降の、編集作業のデジタル化、いわゆる DTP (Desktop publishing) の進行に伴って、フィルムから製版していく従来の工程から、編集から印刷までの工程を、全てデジタルデータで完結していく方式に徐々に最適化されていった。

このように卒業アルバムの歴史は、写真と印刷の歴史であったと言い換えることもできる。湿式コロジオンタイプからダゲレオタイプ、そして小型ネガフィルムへ、という写真技術の進歩は、肖像写真を求める大衆の要望を強く反映していた⁵。写真の小型化、低廉化と、肖像写真への希求が、その後の卒業アルバムの基本的な体裁を決定していった。

また印刷技術の進歩も、卒業アルバムの低廉化を可能とした。かつての写真帖は、糸綴じの、非常に手間のかかる製法だったが、製版印刷の技術が開発されると、同一の体裁を備えた上製本のアルバムを制作することが可能となった。こうした技術的な進化によって、学校に在籍していた生徒達は卒業記念のアルバムを購入することが可能となった。

日本における卒業アルバムの歴史的側面を確認した上で、次章では、具体的な事例に基づいて卒業アルバムの内容、変遷について検証してみる。

3 卒業アルバムの内容の具体的検討

本章で事例として取り上げるのは、H 県の M 高校という市立の高等学校である。この高校は、戦争中の 1942 年に旧制中学校として設立され、1948 年の学制改革以降、高等学校に改称している。

M 高校では、卒業アルバムを学校、同窓会で保管している。保管されている卒業アルバムは、いくつかの欠番を除き全ての年次が揃っている。本章の分析は主に、この卒業アルバムと、同窓会で卒業アルバムをデジタルデータにスキャンした資料に基づいて行っている。

3.1 事例分析：M 高校の変遷

それでは、M 高校の卒業アルバムはどのような変遷を辿ったのだろうか。その過程で、アルバムの装丁、内容はどのように変化してきたのだろうか。まずは M 高校の概要を、生徒数の増減を踏まえつつ描写してみよう。

M 高校は H 市のほぼ中央部に位置している男女共学の公立高校である。1955 年度までは普

5 当時のフィルム制作企業イーストマンコダック社は、「あなたはボタンを押すだけ。後はコダックが全部やります」を宣伝用の標語としていた。

通科、商業科、生活科が併設されており、1955年度の学級数はそれぞれ、普通科9（在籍生徒数約600人）、商業科9（生活科と混合で155名）である。1955年に商業科が廃止され、生活科は1964年に廃止されている。在籍生徒数は1989年まで一貫して増加しており、1954年に総生徒数は約1,000人（21クラス）を超え、1989年には約1,400人（30クラス）まで増加している。その後生徒数は微減傾向にあり、2017年では約1,100人（29クラス）である。

卒業アルバムは、1960年代頃までは時期毎に多様な形態となっている。1947年のアルバムは糸綴じ縦製本で、複数の写真を焼き付けた印画紙を綴じている。だが1948年と1950年（1949年のアルバムは欠番）は、台紙に直接写真を貼り付けた、手作りのアルバムとなっている。1951年刊行の商業科のアルバムは、M高校の近隣の写真館と、奈良県の印刷会社の名称が明記されており、本格的な製版によって作られていることが分かる。ただし普通科に関しては、それ以前と同様に、台紙に直接写真を貼り付ける形態となっており、科ごとに印刷事情が異なっていることが分かる。当時は全て白黒フィルムで撮影されており、印刷もモノクロ2色印刷である。1967年に、モノクロの本紙の一部としてカラーページが加わるようになり、1984年には、全ページがカラーとなった。

これ以降、アルバムの形式の抜本的な変化は見られないが、2000年以降は出版形態のデジタル化に伴い、写真の加工処理、イラストの内容にデジタル技術の影響が見られるようになった。

また卒業アルバムのデジタル化と同時に、アルバム本紙では使用しなかった写真を数百枚収録したディスクアルバムが付属するようになり、アルバム一冊あたりの掲載写真点数は飛躍的に増加した。DTPによって制作される卒業アルバムの形態は、現時点（2016年）まで継続している。

3.2 アルバムの構成の変化

それでは、終戦から数年間は、ページ毎の構成はどのようなものだったのだろうか。

M高校は1945年に戦災で旧校舎が焼失するなど、物理的にも人的にも大きな被害を受けている。そのため、例えば1947年の新校舎設立の時期に制作されたアルバムの装丁は、糸綴じ縦開きの、後年のアルバムと比較して簡素な造りである（図4）。内容は大まかに、教職員の肖像写真、在籍生徒の肖像写真、学校内の風景写真、学校生活の記録写真で構成されている。内容は見開き12ページ構成で、扉（書籍の最初のページ）に、校長、教頭の肖像写真と校旗の写真が掲載されており、続くページ（見開き1ページ）に教職員の集合写真が掲載されている。その次は校舎全景写真（同1ページ）、生徒集合写真（同2ページ）、各クラブ毎に撮影したと思われる生徒集合写真（2ページ）と続いている。表紙に校名と校章が箔押しされている。掲載されている在籍生徒は約100名程度である。第二回卒業生版（1948年）も、写真台紙を束

ねて厚紙表紙で糸綴じした様式で、写真は各ページに直に貼られている。教職員、在籍生徒は集合写真で掲載されている。なおこのアルバムから、ソフトボール大会、文化祭といった学校行事も含まれるようになった。

1951年の卒業アルバムでは、上製本印刷である上に、写真の脇に写植文字が添えられるなど、当時としてはかなり本格的な造りであった。当時は戦後復興の只中という事情も関係したのか、アルバムの体裁や内容は毎年のように大きく変更されていることが分かる。

3.3 制服の様式の変化

次に、当時の肖像写真の変遷について、少し具体的に見ていくことにしよう。例えば 1947（昭和 22）年刊行の卒業アルバムの生徒肖像写真は、後のアルバムのように個々人の肖像写真ではなく、数人のグループで撮影した写真となっている。被写体となっている学生は全て男子生徒で、これも後に正式な制服となる詰め襟の学生服ではなく、帽子と、両胸に蓋付きのポケットを縫い付けた上衣、そしてズボンという出で立ちである。彼らが着ているのは、戦時中の常用服であった国民服であると思われる。全員が同じ服装であることから、当時は国民服を学校制服として採用していたと考えられる。また、互いに肩を組んだり、片手をあごに当てるなど、ポーズにはそれほど格式張ったところは見られない。なお、笑顔の生徒は数人いるが、多くは口をつむり、敢えて感情を示すような表情をしていないように見える（図 5）。

1948（昭和 23）年のアルバムでは、グループ写真に加えてクラス毎の集合写真を掲載するようになった。服装は開襟シャツと国民服の生徒が混在しているが、服装規定のためか、ほぼ全員が学生帽を着用している。

1950（昭和 25）年の高校改称後第一回となる卒業アルバムでは、在籍学生の写真はクラス集合写真とグループ写真、クラブ写真のみで、個別の肖像写真は掲載されていない。

クラス写真の服装を見ると、男子学生は学生帽に国民服、あるいは詰め襟の学生服を着用しており、女子学生は襟だしのブレザーやセーラー服など数種類の衣服を着用している。つまりこの時点まで、制服の厳密な規定はなかったということになる。ただし明らかに普段着と判断できるような服装の生徒がいなかったことから、何らかの基準は定められていたと考えられる。

次いで 1951（昭和 26）年出版の商業科の卒業アルバムの肖像写真は、学生帽に詰め襟の制服で統一されており、この頃に制服の基準が制定されたと思われる。ただし商業科は男子生徒のみであり、女子生徒がどのような服装であったのかは確認できない。

そこで 1952（昭和 27）年の卒業アルバムを確認したところ、男子の上衣は詰め襟の学生服だったが、女子生徒はブレザーやセーラー服、あるいは私服と覚しき服装など、1950年出版のアルバムと同様、多様な服装であった。女子学生の服装は 1955（昭和 30）年には、襟の形な

どいくつかのバリエーションはあるものの、概ね白シャツと濃い色合いのベストで統一されている。

ただし、高校の制服は、衣替えと称して、6月頃に冬用の制服から夏用の制服に切り替えられる場合がある。そのため、卒業アルバムに掲載されている肖像写真は、夏用の制服の可能性も考えられた⁶。そこで、秋頃に行われる学校行事、例えば修学旅行のページに掲載されている写真を確認すると、女子学生の制服は濃い色合いのブレザーである事が確認できた。そのため、女子生徒の制服の統一は、1952年と、男子生徒と較べて2年の違いがあることが明らかとなった。

このように、アルバムの掲載内容から推測すると、冬期制服の服装基準は、遅く見積もっても1954(昭和29)年に定められたとみられる。なぜこの時期に制服が規定されたのか、卒業アルバムの分析のみではその背景まで明らかにすることはできなかった。恐らく戦後復興期の各世帯の経済状況なども影響していると思われるが、その理由を知るためにはさらなる情報の収集が必要であろう。

3.4 肖像写真の変遷

次に、肖像写真ページの様式の変遷について検討してみたい。

現在のアルバムに見られるような、各クラスに在籍していた生徒の肖像写真を氏名と共に掲載する、という形式は、1974(昭和49)年卒業の24回生の卒業アルバム以降に確立しており、それ以前は1952(昭和27)年の3回生から1955(昭和30)年の6回生までの3年間、あるいは1967(昭和42)年の18回生と1968(昭和43)年の19回生の卒業アルバムに同様の肖像写真ページであることを除いては、クラスの全体集合に氏名欄を添付する、あるいは数人ずつのグループ写真に氏名を添える、といったように、年度毎の形式の差異が際立っている(図6)。

また肖像写真の内容も、1984(昭和59)年の35回生のアルバムまでは、あごに手を当てる、顔の前で指で形を作っておどけた仕草をする、といったように、個別性が際立っており、フレーミングは上半身、身体の向きは正面かやや斜め、といったように、肖像写真の様式が画一化するの、翌1985年刊行の卒業アルバム以降のことである(図7)。このように肖像写真の形式に着目してみると、戦後の約20年間は、アルバムの構成、肖像写真の形式に自由度が高かったことが分かる。

ここでは卒業アルバムの年度別比較分析の一例として、肖像写真の変化を取り上げてみた。

6 卒業アルバムの制作は、日程の関係上6月頃に肖像写真撮影を行う場合が多いためである。

こうした分析は、例えば別の学校の卒業アルバムとの比較など、扱う資料の範囲を拡大することで、さらに多角的な分析が可能となると考えられる。これまで検討したように、卒業アルバムには、年代毎に様々に変化する部分もあれば、教員と生徒のページ順といったように、一貫して維持されている部分もある。こうした特徴を踏まえて、時系列に沿った通時的分析、あるいは別の学校との比較分析といった共時的分析の可能性を見出すことも可能だろう。

それでは卒業アルバムの資料的な特徴をどのように整理することができるのか、次章ではこの問題について検討を進めてみよう。

4 文化人類学的資料としての、卒業アルバムの特徴

既に見てきたように、卒業アルバムという印刷媒体は、文字よりも写真の比率が圧倒的に高いという特徴がある。また、掲載されている写真は、予め撮影意図が定められており、掲載の際には選定、編集が施される。こうした点を踏まえると、卒業アルバムとは、まずもって、制作する学校側の意図が強く反映された制作物であるということを認識しておく必要がある。

また、卒業アルバムに多数掲載されている写真は、膨大な読み取り可能な情報を含んでおり、そこから様々な知見を引き出すことが可能だろう。一方で様々な個人が被写体となっている写真を分析対象として扱う際には、個人を特定できる情報の扱いなど、留意しなければならない問題もある。こうした卒業アルバムの特質、有用性、そして留意点についてまとめてみよう。

4.1 文化人類学的資料としての特徴

ここでは、卒業アルバムの文化人類学的資料としての特徴を、大きく 1. 時系列での追跡可能性、2. 時代毎の風俗、生活記録の分析可能性、3. 資料の保管性の 3 点をから見ていきたい。まず 1. 時系列での追跡可能性だが、これは卒業アルバムの構成が、概ね特定の定型に従って構成されているため、時代毎の変化を明確にしやすい、ということである。

卒業アルバムは、当然のことながら年ごとに被写体となる生徒は異なるが、肖像写真は、掲載形態がどのように異なろうとも、基本的な掲載事項となっている。そのため、例えば掲載されている生徒の服装、髪型の変化などを異なった年度のアルバムを時系列に沿って比較検討することができる。このように、特定の形式に沿って、数十人から時には数百人に及ぶような画像資料を通時的に分析可能であるというところに、卒業アルバムの資料的な特質があると言える。

次に、2. 時代毎の風俗、生活記録の多角的な分析可能性についてである。前述のように、卒業記念アルバムに掲載される写真は、ほぼ学内に限定されている。こうした制約はありつつも、特定の行事や学校生活の様子を、紙幅の許す限りできるだけ多くの枚数を用いて描写しようと

するアルバムの性質は、状況そのものを多角的に把握する手がかりを提供するだろう。論点 1. と絡めるならば、同じような時期に行われる行事が時系列に沿ってどのように変化していったのかを把握することも可能になる。

最後に、3. 資料の保管性について述べたい。卒業アルバムの発行部数は、購入対象者数に所定の保管用の部数を加えたものであって、数十から数百部と、商業雑誌などと比較すると極めて少ないが、通常、卒業アルバムを制作した学校は、一部から数部を保管用として収蔵している。確実にアルバムを収蔵している場所、機関がある、ということも卒業アルバムの資料的有用性の一つとして挙げることができるだろう。

4.2 資料として活用する際の留意点

以上のように、卒業アルバムは多数の写真を含んでおり、様々な分析に応用可能であることを示した。同時に、写真を多く掲載する印刷媒体故に、考慮しなければならない問題も多い。中でも最優先で指摘しておかなければならないのは、写真の肖像権の問題と、卒業アルバムの著作権の問題である。

まず肖像権の問題について述べる。アルバムで使用する写真は、生徒の顔が写っている写真が中心となる。特に個人写真を掲載しているページでは、個々人の顔が大きく明確に写され、氏名も記載されている。これはページの特性上、当然のことではあるが、資料として我々第三者が閲覧、利用する際には、その肖像権を無断で侵害することがないように、という配慮が必要だろう。

回りくどいようだが、ここで肖像権とはどのような概念なのかを確認しておきたい。

肖像権とは、個人の人格的権利を保護することを目的とした権利である人格権の一つと考えられており、「何人も、その容貌、姿態を撮影されない自由」である⁷。ただし、日本においては、日本国憲法第 21 条に表現の自由は明記されているが、肖像権に関する事を法律で明文化したものは存在しないため、実質的に刑法などにより法律上の責任が問われることはないという。ただし、個人の尊重、幸福追求権について定めた日本国憲法第 13 条⁸、並びに財産以外の損害の賠償について定めた民法第 710 条に従って⁹、民事訴訟の対象とはなり得る。このよう

7 社団法人私立大学情報教育協会 2004・2005

8 日本国憲法第十三条 「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」。

9 民法第 710 条 「他人の身体、自由若しくは名誉を侵害した場合又は他人の財産権を侵害した場合のいずれであるかを問わず、前条の規定により損害賠償の責任を負う者は、財産以外の損害に対しても、その賠償を

な経緯のため、肖像権の確立は、範例の積み重ねによって形作られてきた¹⁰。

その肖像権を厳密に適用するならば、卒業アルバムを資料として利用する際には、掲載されている個々人の使用許諾が必須ということになる。しかし現実には、その人数は数十人から数百人に及ぶことが珍しくないため、全員から許諾を得ることはほぼ不可能である。これが数十年も前に出版された卒業アルバムの活用ということであれば、許諾がますます困難になることは自明であろう。

そこで卒業アルバムの使用に際しては、代案が必要となる。まず顔写真、氏名などの個人が特定可能な部分に関しては、修正を施して読み取りを不可能とする、という技術的対策が考えられるだろう。特に個人写真が掲載されているページを画像資料として使用する場合は、修正にかなりの労力が必要となると思われるが、肖像権に基づいた個人のプライバシーの重要性が社会的に広く認知されている社会的現状を鑑みると、こうした措置は必須であると考えられる。

次に、卒業アルバムの保管元である学校に、アルバムの使用許諾を得ることである。本来著作権は撮影した個人、あるいは企業に帰属するが、卒業アルバムの制作に際しては、学校側に著作権が委譲される場合が珍しくない¹¹。このように著作権の帰属先をまず確認して、アルバムの引用や掲載の際には、著作権者に許諾を得る必要がある。前述の肖像権の問題を鑑みると、著作権者の許諾を以て、卒業アルバムに掲載されている全ての個々人から許諾を得たと見なすことは、使用許諾の恣意的な拡大解釈であるかも知れない。しかし利用の目的が、あくまで学術調査の資料としての活用であって、商業的な利用は一切行わないこと、ましてや個人情報の取得は一切意図しておらず、さらに卒業アルバムに関わる個人情報には厳重に管理すること、これらのことを学校側に明確に示せば、卒業アルバムの利用手続きとしては十分であろうと考える。

4.3 卒業アルバムの所有者の観点

本稿ではここまで、卒業アルバムの資料的特徴を考察することに重点を置いてきたため、アルバムの所有者にとってアルバムがどのような価値や意味を持っているのかといった主題には

しなければならない。

10 なお肖像権には、「肖像を提供して対価を得るという財産権の側面も持っている」が、「プライバシー侵害」を巡る幾多の訴訟の過程で、人格権としての肖像権が主に論議の対象となってきた。wikipedia「肖像権」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/肖像権>)の記述を参照。

11 ただし、著作者の人格的利益の保護を目的とした著作人格権は、著作権の移転後も著作者が保有するというのが一般的な法解釈である（著作権法第59条）。

取って踏み込まなかった。しかし卒業アルバムを文化人類学的に考察する上で、この問題は極めて重要な意味を持つだろうと考える。一体卒業アルバムはその後所有者にとってどのように扱われるのだろうか。本棚の奥にしまい込まれて、時々思い出したように見返される本なのだろうか。それとも元の級友と再会した時に過去の出来事を想起するための道具となるのだろうか。筆者は今回の論考のための調査を進めていく過程で、こうした卒業アルバムとその所有者の関係について、考察する手がかりを得た。そこで取って、その状況を補遺的に描写してみたい。

その状況とは、M 高校の同窓会が主催した同窓生の集いで的一幕である。この同窓会は、元卒業生を中心とした事務局によって運営されており、高校側とは緊密な連携関係にあるものの、あくまで独立した組織である。この事務局の最も主要な活動は、毎年夏期に、全卒業生を対象とした同窓会を開催することである。同窓会の運営には、事務局だけでなく各回期の同窓生も輪番で担当しており、この当番回期は 10 年で一巡する。こうした運営構造により、同窓会の集いの参加者は、当番回期の同窓生が多くを占めることになる。もしこの会の出席者を回期毎にまとめたグラフを描いたとすると、それは概ね 20 歳代から 80 歳代（あるいは 90 歳代）の同窓生が、ちょうど 10 年間隔で厚い層をなしている、という構図となるだろう。

同窓会の集いで筆者が観察した状況の一端を記述してみたい。幾人かの来賓者の挨拶、乾杯といった進行が一通り済むと、会場のそこかしこで回期毎にまとまって小グループを作り、歓談が行われた。時折そのグループの中に、来賓として参加している元担任の教諭が加わる場面も見られた。

そんな中、回期毎の幹事を務める同窓生、あるいは複数の同窓生が、卒業アルバムを持参し、それを何人かで回し読みしている状況が複数確認できた。特に彼らの関心が集中するのは、クラス毎の肖像写真のページである。それぞれかつての自分や級友の写真を指さしながら、当時はあんなことがあった、と言った思い出話をするこゝもあれば、目の前で歓談している級友と本人の肖像写真を見比べながら、当時と較べてどれだけ容貌が変化したのか、とからかってみたり、あるいは逆に、級友の容貌の変化の少なさに驚きの声を上げてみたりする。肖像写真のページがこのような同窓生にとってどれほど大きな意味を持つのかは、例えばアルバムを持参する代わりに肖像写真のページだけを抜き出したコピーで小冊子を作成し、同窓生に配布する学年幹事がいることからもうかがえる。

これらの場面において、卒業アルバムが、かつて級友として密接な関わり合いを持った人々と、当時の関係を再認識する一種の記憶装置として機能している、と解釈することは不自然ではないだろう。しかし卒業アルバムは、制作されて数十年経つにも関わらず、その「賞味期限」が切れていない、というのは、一見当たり前のように思えるが、不可思議なことでもある。卒

業アルバムは、その当初から、かつての級友同士の繋がりを再強化することを目的として制作されたのだろうか。それとも長らく卒業アルバムを手元に置いたかつての生徒が、アルバムを記憶装置として自在に活用する術を手に入れたのだろうか。

この問題については、文化人類学者プラースの議論が参照になるだろう。彼は、個人の人生に於いて、その折々に親密な関係を結ぶ人々の存在が、その個人のライフコースにどのような影響を与えるのか、という主題を追求し続けた。その主題を引き継いだ金田によると、プラースは、日本における長期的な関係の変化に関する文化人類学的研究を通じて、人が長期間にわたって人生を形成していく過程で、身近な人々との相互交渉とそれを通じた承認の重要性を指摘した、という [金田 2010: 105、プラース 1985]。のちにプラースは、「人生後期において、モノを介して身近な人々との関係が再形成されること、そして、身近なモノとの長い付き合いもまた人生形成に役割をはたす」 [Plath 2000、金田 2010] として、かつての親密な関係を再確認、再形成する際には、何らかの媒介物が重要な役割を果たす可能性を指摘した。

さらに金田は、「内なる同行者」 [金田 2010:114] という概念を提起する。ここでいう同行者とは、過去の思い出として想起される自己像のことである。過去を想起する人は、かつての自分と現在の自分との間に大きな相違があることを認識している。しかし過去の自分は、全く別の存在なのではなく、距離感を感じさせないような同行者なのだという。そして「今の自分の自己イメージが、記憶の中の子供時代の自分の感覚や感情によって形成・再形成される」 [プラース 1985、金田 2010: 116] と指摘している。こうした金田の論考は、主に高齢者との対話によって導き出されたものであるが、上記の同窓会の事例は、過去の自己やかつて親密な関係にあった人々の再確認は、「内なる同行者」との対面という、自己完結的な行為だけでなく、他者との相互行為によってもなされ得る、ということを示している。卒業アルバムが、それを保有する人々のライフコースにおいてどのような役割を果たしているのか、という論点は、プラースのライフコースに関する論考を踏まえることで、さらに多様な議論に展開しうる可能性を秘めてはいないだろうか。

5 結語

改めて本稿で議論した内容を再確認してみよう。日本における卒業アルバムの歴史は、写真帖と呼ばれていた時期を含めると 110 年以上にわたる。その過程は、写真と印刷技術の進化の歩みとも重なり合っている。

卒業アルバムは、ページ毎に配置する写真の内容が定められており、この配置の定型は、ある程度の連続性を持っている。その時間的尺度が、学校によっては数十年に及ぶことを踏まえれば、卒業アルバムは複数の年次を時系列順に掘り下げていく、いわゆる経時的視点からの分

析に適した資料であるといえる。こうした視点に則って、M 高校を取り上げた事例分析では、特に終戦直後から 10 年程度の、肖像写真の変遷に着目して検討を試みた。このように、卒業アルバムが、様々な分析に耐えうるだけの豊富な情報を含んだ印刷媒体であることを様々な角度から検証したが、一方で卒業アルバムは、著作権、肖像権の問題と密接に関連した資料である。特に近年、個人情報の保護の意識が社会的に高まっていることから、個人が特定できるような写真の取り扱いには慎重さが求められる。こうした資料の学術利用と権利保護を巡る問題は、法的解釈も含めて、今後も幅広く議論されるべき課題だろう。

本論での議論をさらに展開させるためには、卒業アルバムに対するより多角的な視点を導入することが必要だろう。例えば、本稿ではあえて取り上げなかったが、卒業アルバムというものに対してそれほどの価値を見出していない人々、あるいは議論の後半に事例として取り上げた同窓会への参加を回避する人々ももちろん存在するし、その割合は決して低いものではない。ある人々にとってはかつての級友達との関係持続が大きな関心事であるのに対して、そうした関係、記憶からできるだけ遠ざかりたいとする人々がいる。両者の認識の違いの背景にあるものは何だろうか。

筆者は以前、学校の卒業後に、卒業アルバムを破棄する人々が一定数存在する、という内容の情報を目にしたことがある¹²。こうした情報から、卒業アルバムという形で写真や情報を保管することが必ずしも全ての人々に共有されている訳ではないことが分かる。卒業アルバムの意味や価値は、こうした人々の見解を取り込むことで、さらに立体的なものとなると考える。

卒業アルバムがその所持者のライフコースに対する認識や級友との関係の持続にどのように作用しているのか、この主題については、様々な知見や情報を得ていたにも関わらず、論述の一貫性を優先して、今回は IV 章の後半でわずかに触れる程度に留めた。しかしながら、この議論はさらに長い時間を考察を深めていくべき課題であると考え、今後の課題としたい。

本稿の結びに当たって、筆者に文化人類学的な探求を行う機会を与えて下さった佐野先生に感謝の意を表したい。

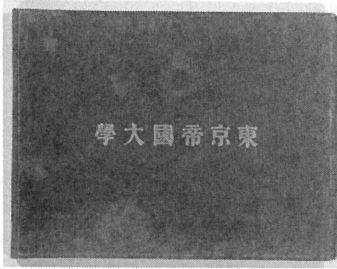
筆者は文化人類学を志した当初から既に職業写真家として職務に従事しており、もとより研究に割くことのできる時間自体に大きな制約があった。その上、人類学的思索を深めるだけの個人的な能力、資質に欠けていたことには十分な自覚があった。そうした筆者に対して佐野先生は忍耐強く指導を重ねて下さり、学業の全うに導いて下さった。本稿はそうした佐野先生のご指導に対する感謝の意でもある。

12 インターネットリサーチ「Qzoo」の調査に基づいた「20代男性の18.0%が処分済み！卒業アルバムを捨てる理由ってわかりますか？」<https://sirabee.com/2014/11/13/7725/>など

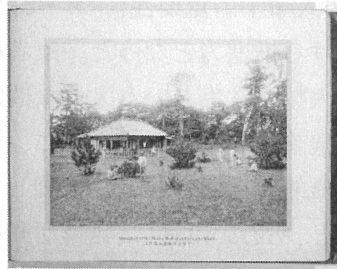
佐野先生は在学中より、応用人類学の重要性について熱心に説いて下さった。このご指導は、筆者が文化人類学を追究し続ける推進力となった。筆者にとって文化人類学とは、職業を通じて得た経験と知見を用いて、人類の営みという大きな問題を迫及する可能性を提示してくれる学問である。そのため本稿の議論がそうであるように、筆者の文化人類学的考察とは、まず第一に職業的写真家という専門職能者であることに立脚している。自身の経験や能力を文化人類学の発展のために活用すること、あるいは逆に、職務活動を文化人類学的な観点から捉え直し、その社会的意味を理解したり、より人々の福祉に資する活動の創造に結び付けることは、一種の応用人類学的実践なのではないかと考える。そしてこの実践の追求をすることによって、職業 1 写真家兼文化人類学の学徒という筆者の特異な属性が、意味あるものとなっていくのではないかと考えている。

佐野先生、そして本稿の執筆に多大なご協力を頂いた M 高校、M 高校の同窓会の方々に感謝の意を表して、本稿の締めくくりとしたい。

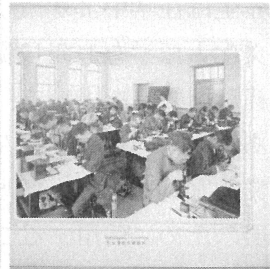
参照資料



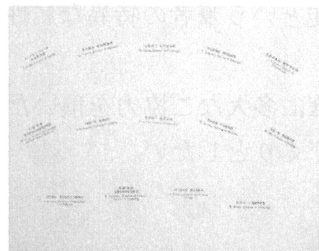
(図1)『東京帝國大學』写真帖(1900)。横綴じ製本



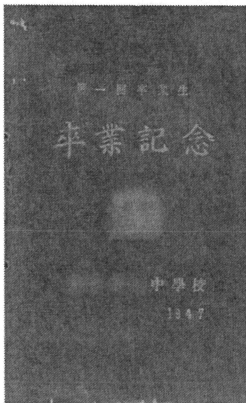
(図2)『東京帝國大學』写真帖(1904)。大判フィルムを直接印画紙に焼き付けているので、一ページ一枚の写真のレイアウトとなっている。



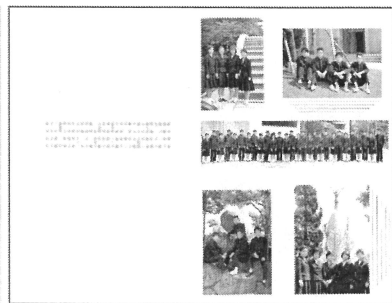
(図3)『東京帝國大學』写真帖(1900)。教職員肖像写真ページ。氏名は別紙に記載している。



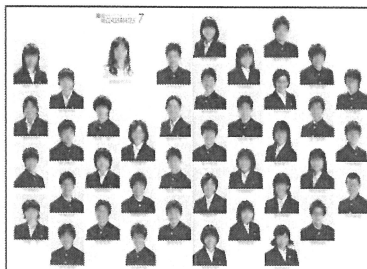
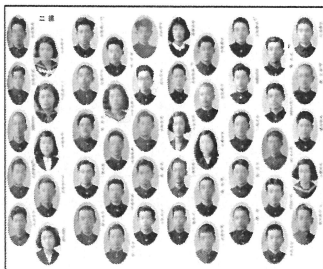
※(図1)～(図3)は、東京大学総合図書館所蔵資料より引用。
 『東京帝國大學 = Imperial University of Tokyo 東京 小川寫眞製版所 1900.4-1904.8 2冊 28×37.38cm』
 (引用元) <http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/shashincho/index.html>
 (公開資料のため、人物に目隠しなどの加工は施していない)



(図4) M高校の前身である、旧(図5)1947(昭和22)年出版の卒業制中学の卒業アルバム(1947) アルバムにおける生徒集合写真



(図6)1965(昭和40)年出版の卒業アルバムにおける生徒集合写真。集合写真と氏名欄を分離している。



(図7)1953(昭和28)年出版の卒業アルバム(左)と、2012(平成24)年出版の卒業アルバム(右)に掲載されている生徒肖像写真ページ。

参考文献

ボーモント・ニューホール

1996 『写真の夜明け』小泉定弘、小斯波 泰(訳)、朝日ソノラマ

Ginosar S, Rakelly K, Sachs S, Yin B, and Efros A.

2015 *A Century of Portraits: A Visual Historical Record of American High School Yearbooks*. Proceedings of the IEEE International Conference on Computer Vision Workshops.

韓東賢

2006 『チマ・チョゴリ制服の民族誌—その誕生と朝鮮学校の女性たち』 双風舎

金田光世, 佐野敏行

2010 「記憶のなかの子ども時代の自分との出会い—内なる同行者との諸関係」 人間文化研究科年報, 第 25 号, pp.105-118.

ナオミ・ローゼンブラム

1988 『写真の歴史』飯沢耕太郎・日本語版監修 美術出版社

プラース, デビッド・W

1985[1980] 『日本人の生き方』井上俊・杉野目康子(訳)岩波書店

Plath, David W.

2000 *Epilogue: downsizing the material self: Late life and long involvements with things. in Caring for the Elderly in Japan and the U.S: Practices and Policies*. (Edited by Susan Orpett Long) Routledge, London & New York) Pp. 334-343.

飯沢耕太郎監修

2004 『カラー版 世界写真史』 美術出版社

写真帖『東京帝國大學』

2008 東京大学附属図書館・情報基盤センター

<http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/shashincho/main.html>

東京都写真美術館編

2007 『夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史 1 (関東編研究報告)』

Abstract

An examination of the usefulness of the school year book in the study of the cultural anthropology

Yutaka Okubo

The purpose of this study is clarifying the value of using the school year book for research in cultural anthropology.

The school year book as a publication has a history of more than 100 years in Japan. Over time, the album evolved from monochromatic print to full color and from thread binding to superior binding. The school year book is composed of a large number of photographs and has as a characteristic that it is published regularly. In addition, the school year book includes photographs of students and teachers and a record of life at the school. Therefore, the school year book provides a chronology of the living environment in the specific school. Actually, research on the chimachogori uniform of Korea relied heavily on the school year book for data.

In this paper, I analyzed the school year book. As a result, it became clear that examining the school year book every generation can make it extremely easy to identify a change in both school uniforms and the living environment.

However, circulation of the school year album is extremely limited, making it difficult for an outsider to read the school year album for a research study. Moreover, there are privacy issues in the use of personal information from school yearbooks.

I clarified the usefulness of the school year album in cultural anthropology while pointing out some problem areas in this report.